学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１１年６月　４日
文責：ＪＵＮ

「学ぶのは子ども」という大前提を

１．　学びの大前提

学びの大前提は、学ぶのは子どもだということです。当たり前のことのようですが、子どもたちに自らの学びをしっかり実行させるよりも、教師が教えてしまうことのほうが多いように思われます。

子どもが学ぼうとすれば、そこには、わからなさも、間違いも、方向違いも生まれます。そのからまった糸をほぐそうとするところに学びがあるのですから、そこにはある程度の困難が伴います。その困難さの中で、ああでもない、こうでもないと考えることが、子どもに豊かな学びをもたらすのです。だとすれば、教師は、早くわからせることよりも、そのまどろっこしいとも思える探求を大切にしなければなりません。

そこでお聞きしたいのですが、皆さんは、そういう子どもの中に生まれているものをみようとしていますか。どこがわからなくてどう考えているのか、どういう間違いを起こしているのか、しかし、そこにどういう可能性があるのか、逆に、どんな素敵な発想が芽生えているのか、みようとしていますか。それは、特定の子どもに対してだけではありません。すべての子どもに対して、そう心掛けているかということです。

２．　子どもの学びが生まれるためには

まず、大切なのは、授業に、子どもがさまざまなことを考え探求する時間と場があるかどうかです。わたしがかかわる学校ではその時間と場を設けるように務めていますが、一般的には、意外と少ないように思われてなりません。一人ひとりの子どもに取り組ませる時間を十分設けないで、早くわかる子どもの反応を頼りに、「こういうようにするのですよ」と進めてしまうケースが多いように思います。

そういう教室では、発言する子どもが偏り、その一方で、黙っている子ども、ぼんやりしている子どもが何人も生まれています。そして何よりも危惧されるのは、わからなさや間違いが姿を現さないということです。わかなさや間違いこそ学び誕生の大元なのに、それは恥ずかしいこと、いけないことになってしまっているのです。こういう教室における教師は「わかった？」を連発し、「わかった人」「できた人」と尋ねてしまっているのです。

子どもに学びが生まれるためには、教師が、子どもの考えを知りたいと思い、それがどんなにわからないことであっても、たとえ間違いであっても、そこから子どもとともに学びを生み出したいと願うことです。その思い・願いがなければ、子どもに魅力的な

学びを生み出せるはずがありません。
　その思い・願いを抱いている教師は、早く教えることよりも、まずは子どもに考えさせます。ていねいな課題提示をして、どんなにわからないことがあっても大丈夫なのだという安心感を抱かせて取り組ませます。
　もちろんその安心感は口先だけのことでは生まれません。子どものわからなさこそ学びの大元なのだという本気さが教師になければ、それは子どもに伝わりません。この本気さがあって、実際に間違いやわからなさから学びが生み出す場面を毎日のようにつくることで、どの子の心の中にも安心感が生まれるのです。
　そうなったとき、子どもたちは、困難さに立ち向かうことをいとわなくなります。考えてみよう、あきらめずに取り組んでみようとするようになります。こうして、まずは自分で考えてみるという学びの作法が身につくのです。

３．　学び合う教室にすること

　当然のことですが、課題のレベルが上がり、その探求に複雑さが増してくると、一人では行き詰ってしまう子どもが出てきます。この状態を放置すると、いつの間にか、学びに積極的になれない子ども、あきらめてしまう子どもを生み出してしまいます。そうなると、いくら子どもに時間と場を与えても、すべての子どもに取り組ませることは無理なのではないかということになり、やはり教師が段取りよく教えなければならないということになります。もちろん段取りよく教えなければいけないこともあるでしょう。しかし、高水準の課題で子どもの探求から進める学びは可能なのです。ある一つの学び方が教室に存在していれば…。それが「学び合い」です。
　子どもだけでなく、人はみなそうですが、一人で成し得ることはたかが知れています。ましてや、理解に時間のかかる子ども、不得意な分野で難渋している子どもは、自分一人ではその取り組みを進めていくことができなくなるのです。そういうときに、そのわからなさに寄り添い、ともに考えてくれる仲間がいれば、どんなによいでしょうか。
　わたしがここで述べる「学び合い」は、教え合いのことではありません。早くわかった子どもがやり方を教えてくれるかかわり方のことではないからです。それでは、わからないでいる子どもの学びは生まれません。そのわからなさがどこにあるのか、そのわからなさの中から糸口を見つけて、ともに歩んでくれるかかわりが「学び合い」です。教師が「学び合い」ということをどう考えているか、それは決定的に大切です。
　「学び合い」は、わからないで難渋している子どものためだけによいのではありません。すべての子どもにとって素晴らしいことなのです。
　わたしは、学びはわからなさが大元だと述べました。それは、からまった糸をほぐすような思考が学びだと思うからです。だとすると、なんとなくこういうことだとわかっていた子どもも、わからなさに同伴し、ていねいに考えを辿ることで、なるほどそういうことなのだと納得することが生まれてくるのではないでしょうか。それは、機械的にやり方だけを身につけていく学習とはまったく異なる質の学びを子どもにもたらすのだと思います。「学び合い」は、すべての子どもの学びを豊かにするのです。
　このように、だれかのわからなさに寄り添う学び合いはすべての子どもの学びになるのですが、ときには、ほとんどの子どもにとってはっきりしないことに取り組むことも

あります。そこでも、もちろんのことですが、学び合いが威力を発揮します。それぞれの子どもが、それぞれの気づきを出し合い、考え合うことで、一人では考えつかないことに辿りつくことができるからです。

学び合いは、すべての子どもが、「学ぶのは子ども」という大原則を実現するためになくてはならない学び方です。そして、学校こそそういう学び合いができる場だということを、わたしたち教師は自覚する必要があります。

４．　グループの学びが軸

学び合いというと、クラス全員での話し合いというイメージを抱く人が多いように思います。明治以来、日本の学校は一斉指導型授業の熟達を追求してきたと言えますから、そのイメージからすると、どうしても全員での場面を思い浮かべるのでしょう。

しかし、わたしが述べたような学び合いをクラス全員の場面で実現するのはかなりの困難を要します。わからなさが言え、それを温かくやわらかく受け入れ、そこから子ども相互の聴き合いによって学びを生み出していく、それを３０人もの人数で行うにはかなり確かな横のつながりが必要です。そこまでの雰囲気と意識の高まりを一気に実現するのはまず難しいと言ってよいでしょう。

子どもたちが、無理をしなくても互いの考えを素直に出し合い聴き合えるのはどういうときでしょうか。わたしは、それは、ごく少人数のときではないかと思います。「ねえ、どう思う？」「わたし、こう思うんだけど、どうかなあ？」「わからないよ！」などとありのままを出せるには、緊張を感じない少人数のほうがよいのではないでしょうか。もちろん、それには学級全体にそういう雰囲気を助長するような教師の働きかけが不可欠ですが、その働きかけの上で、そういう率直なグループのかかわりを推奨するのです。そして、そういうかかわりが生まれたグループの事実を認め、そこから全員の学びにもつなげるのです。子どもたちは、そういう経験の中で、学び合いのよさを実感し、やがて、クラス全員による学びの場でも、特に力むことなく学び合うかかわりを実現するようになるのです。

５．　教師の授業観の転換こそ

そこで、大切になるのが教師の授業観です。

学び合う授業を目指し、グループで学び合う時間を多く入れるようになった学校がありました。確かに、どの教室に行っても、グループが組まれていました。しかし、子どもたちの表情にそれほどの精気が感じられず、学び合う温かさと面白さがなかなか生まれませんでした。

どうしてそういうことになったのでしょうか。全学級の授業を参観してわたしが感じたのは、「学ぶのは子どもだ」という授業観が、教師たちの中でしっかり受け止めきれていないということでした。それは、子どもがどう考えているのか、どんなことにつまずいているのかといった子どもの事実を全身で知ろう、受け止めようとする雰囲気が弱いというところから感じたことでした。

熱心な先生たちでした。子どもたちのことも一生懸命考えてもいました。しかし、子

どもを信じ子どもの出方を待つことができず、先走って介入してしまっていたのです。つまり、子どもの事実が出るまでに教師が出すぎてしまっていたのです。これでは、子どもは十分に探求を味わうことができないばかりか、少し考えるとすぐ先生が説明してしまうのですから、なんとも中途半端なことになってしまったのです。

わたしは、日本の教師が、子どもの事実を待つこと、子どもの事実から学びを創るようにすることがどんなに難しいことなのかを知りました。それほど、いわゆる「教える」授業がからだに沁み込んでいるのです。そもそも「授業」という言い方がそれを表しています。

「学ぶのは子ども」という大原則を実現するには、この日本の教師の体質を変えなければなりません。そして、子どもの事実を「みる」「聴く」「受信する」感覚と意識を確かなものにしなければなりません。つまり、教師の授業観の転換なしには、「学ぶのは子ども」は具現化できないということなのです。

わたしは、決して、教えなくてもよいということを言っているのではありません。教えなければいけないことはたくさんあるし、子どももまた教師に教えてほしいことをいっぱい持っているのです。しかし、そうして教師がていねいに教えたことが、子どもが自らの学びに立ち向かうときに生きることが大切なのです。教師の教えと、子どもの学びがそのような相互作用を起こしたとき、教師が教えることも意味を持ち、それを生かした魅力的な子どもの学びが姿を表すのです。

人は、大変な憧れを抱いたときか、強い挫折を味わったときしか本当には変われないとわたしは思っています。もし、いま、挫折らしきものを感じていらっしゃる方がいたら、本気で「学び合う学び」への転換を考えてください。また、「学び合う学び」を目にして憧れを感じた人がいたら、今がチャンスだと考えてください。そのどちらでもないけれど、わたしが申し上げることに魅力を感じた人がいたら、「学び合う学び」に取り組む学校に出かけてください。東海国語教育を学ぶ会の例会においでください。また、7月28日～29日に大津プリンスホテルで行う「授業づくり・学校づくりセミナー」に参加してください。授業観の転換なしに、すべての子どもが安心して学べる「学び合う学び」は実現できないのだと考えて…。行動を起こすところから、転換の可能性が生まれます。

●○●　授業づくり・学校づくりセミナーのご案内　●○●

今年も「授業づくり・学校づくりセミナー」の案内要項を配布する時期になりました。そして、いよいよ参加受付が始まります。

今年は、例年より10日ほど早い、7月28日（木）～29日（金）の開催です。会場は昨年と同じ大津プリンスホテルです。プログラムをご覧いただくと感じていただけると思いますが、今年も魅力的な内容です。全国から参集される先生方と熱い学びの時間を持てること、楽しみにしています。

たくさんの先生方のご参加をお待ちします。